

日蝕と月の女

——新聞小説としての『婦系図』——

鬼 頭 七 美

泉鏡花の『婦系図』は、新派による演劇化や度重なる映画化の影響もあり、鏡花の小説のなかでも知名度の高いもの一つである。しかし、その知名度とは裏腹に、文学研究の世界では概して評価は高くない。これまでに蓄積されてきた先行論文にしても、実在のモデルを確認し、それを小説の読解に直結するか、鏡花の他の小説に見られる〈母恋い〉のテーマという観点から小説を解釈しようとするか、といったものが多く、小説そのものを正面から分析の対象とした研究は、いまだ充分に行われてはいない。

また、物語内容に関する検討を行う場合にも、小説そのものを自律した物語として扱うのではなく、演劇化による変容を前提とした議論がなされてしまうことがしばしばである。すなわち、演劇化によって前景化されたお蔭をめぐる前半のプロットが注目を集める一方、後半で焦点化される菅子をめぐる物語は、前半部分と整合性を欠いているとみなされ、その結果、小説『婦系図』は全体としての統一性のない失敗作であるという評価が定説となってきた。

しかし、小説としての『婦系図』は本当に、一貫性を欠いた、ちぐはぐな物語なのだろうか。むしろ、『婦系図』を「湯島の境内」の場面で代表させてしまうような新派劇の知識を必ずしも共有しな

い今日の読者にとって、この小説はそれほどちぐはぐな印象を与えないのではないか。そしてまた、こうした読者は同時に、鏡花の伝記的情報をも共有しておらず、〈母恋い〉といった鏡花受容のジャーゴンを知らないとしても、おそらくこの小説は興味深く読みうるのではないか。

そうだとすれば、小説『婦系図』の魅力はどこにあるのだろうか？ そのように問い返すとき改めて想起されるのは、この小説がそもそも、新聞小説として書かれていたことである。物語の全体像を把握するすべを持たず、次回への期待を繋ぎながら物語を読み進める新聞小説の読者たちにとって重要なのは、直後にどのような展開が起こるのかというスリリングさであり、また毎回登場する作中人物たちが体現する人間的魅力（キャラクター造型の巧みさ）であろう。

本稿は、『婦系図』を改めて新聞小説として捉え返し、その面白さの所以を明らかにする試みである。

一 遺書の付加と抹消

『婦系図』は一九〇七（明治四〇）年一月一日から四月二八日にか

けて「やまと新聞」に連載された新聞小説である。この約一年後に前篇・後篇に分けられて春陽堂から単行本化された(『婦系図』前篇、一九〇八・二、『婦系図』後篇、一九〇八・六)。

鏡花が「やまと新聞」に小説を連載するに当たって、友人の登張竹風の関与があったことはよく知られている。前年の年の暮れ、一九〇六(明治三九)年二月二十五日に、逗子に住んでいた鏡花のもとを訪れ、「やまと新聞」への連載を依頼した竹風に対し、鏡花が「おもしろい材料はないかね」と問いただし、竹風が「揣摩の話」を提供するというものである。ただし、この竹風による回想文には誤りのあった可能性が指摘されている。すなわち、鈴木康子によれば、鏡花の新小説の連載を予告する記事が、実は一九〇六年二月二一日から見出されるからであり、かつ、竹風によって提供された「揣摩の話」と、それが利用された「隼」の章での早瀬主税の来歴とは、両者が「一致しすぎて」おり「話が出来すぎている」と感じられるからである。

もっとも竹風による回想文が、鏡花の思い出話から始まり、『婦系図』の酒井俊蔵のモデルを自分だとして得意気に物語るものであることに引きずられたのだろうか、鈴木康子は新聞紙面で初出本文を確認し、単行本化に当たって主に後半で大幅な改変が試みられていることを丹念に跡づけながらも、この改稿をやはりモデル問題へと収斂させ、モデルとなった人々への配慮によるものとして指摘するのみで終わっている。しかし、このような新聞連載時から単行本への改稿は、なぜ改変されたのかを問うよりもまず、この改変によってどのような物語からどのような物語へと改変されたのかを読解すべきであろう。初出本文と単行本本文とは、その志向する方向

性において、いかに違っているのか、または似たようなものであるのか、本文そのものの全体像を問うことによってはじめて、小説『婦系図』の統一像を描き出すことができると思われる。

こうした観点に立つとき、まず問われることになるのは、物語末尾の遺書の改稿と抹消の問題についてであろう。

周知のように、早瀬主税の服毒自殺を描いて終わる初出本文に対して、単行本では「早瀬の遺書」が付加された。さらに春陽堂から出された『鏡花全集第七卷』(春陽堂、一九二五・一一)において「早瀬は深く云々以下、十九行抹消。——前篇後篇を通じ其の意味にて御覧を願ふ。はじめ新聞に連載の時、此の十九行なし。後単行出版に際し都合により、徒を添へたるもの。或はおなじ単行本御所有の方々の、こ、にお心つかひもあらむかとて。」という抹消の断り書きが付加され、遺書の部分が全面的に抹消されることになった。この奇妙な改稿の履歴はどのようにして説明可能となるのか。

春陽堂版全集において、抹消の断り書きによって無効とされたはずの遺書部分に重ねて改変を施し、それまでの物語を攪乱している点については、すでに金子亜由美による考察がある。金子によれば、単行本において、早瀬主税が河野英吉に宛てた遺書のなかで「英吉君、能ふべくは、我意を体して、更めて酒井氏の阿嬢を娶りて、より美しく、より清き、第二の家庭を建設せよ」と述べる件りのなかで(傍線部分)「更めて酒井氏の阿嬢を娶りて」が削除されていることは、主税が遺書において、酒井俊蔵の娘・妙子と家庭を作れと述べるのではなく、単に(誰でもいいから)伴侶を見つけて家庭を作れと英吉に向かって述べるといふように改変していることになる。

ここで、これに付け加えて注意したいのは、「早瀬は深く云々以

下」が抹消されている点である。この改変によって早瀬主税は服毒自殺しなかったことになり、全ての事件が終わったあと、主税は、眠る妙子の傍らで、かつて夫婦同様に暮らした亡きお葛の黒髪を抱いている、という情景で終わる物語を指向していることになる。

ただし、春陽堂版全集では、こうした改変のあとを、あたかも見せ消ちのように見える形で抹消とのみ作者の言葉を付し、先の「更めて酒井氏の阿嬢を娶りて」のように完全に本文から削除してしまわない（異同を確認しないと分からないような完全削除を行わない）ことには、注意が必要であろう。すなわち、春陽堂版全集では、主税が自殺しない物語として読まれることを指向しながらも、これと平行して、たとえ当初のように主税が自殺する物語として読まれたとしても、その遺書内容によって、英吉は別の女性と結婚するだろう、妙子は英吉のものにならないだろう、という読みを読者に促していることになる。

これらをしも「創作上のミス」と読むことは、それぞれ読解上のミスではなからうか。「早瀬の遺書」の付加にしても「これまで読んできたストーリーそれ自体を完璧に無化しするような告白」と言うよりは、むしろ主税一流の啖呵のようなものであり、英吉にのみ向けられた方便のようなものとして機能していると言わべきだろう。⁵⁾

二 〈月〉が〈日〉を蝕む物語

これまで述べてきたように、物語末尾の遺書の改稿と抹消の問題は、主人公とも言うべき早瀬主税が死ぬのか死なないのかということとをめぐる改稿・抹消であるため、物語の読解にも関わってくる重要な問題である。とはいえ、この物語の主要な関心は、主税が死ぬ

かどうかにあるのではなく、主税が何を問題にし、何と戦うことを余儀なくされたのか、ということにあるだろう。その主税の生き方あるいはこだわりをきちんと読解するならば、末尾に遺書を付加したことや、それを含む物語設定（＝主税の自殺）そのものを抹消するという試みは、実は大した瑕疵にはならないのではないだろうか。⁶⁾

主税は、鶯吉という芸妓を落籍し、夫婦の真似事のような同棲生活を送るも、これは自分の師である酒井には秘密であった。一方で、酒井の娘の妙子を芸者遊びの仲間である河野英吉が見初め、結婚の相談を主税に持ちかけ、妙子の品行、遺伝、借金などについて聞いたし、「裸体にして検査するような事を聞く」（「縁談」の章）に及び、主税はこれに猛反発の態度を示す。義理や恩義のある師の娘・妙子への純然たる義憤なのか、ほのかな愛情がそこに含まれるのか、にわかには判別しがたい態度でもって、主税は妙子の行く末を案じ、師の意向を受け入れる形で鶯吉とも分かれた主税は、河野一家の「家族主義」（「草深辺」の章）を駆逐するべく静岡へと下る。注目すべきであるのは、このような主税を中心として、物語内部において多数の女性が配置される『婦系図』では、女性たちそれぞれにユニークな属性が付与されていることだろう。例えば、酒井と長い馴染みであり、物語途中で実は妙子の産みの母だと明かされる芸妓・小芳は、その登場の仕方において「水のように透通る細長い月の中から抜出したよう」（「柏家」の章）と形容され、ついには「月に露添う顔を見て」（同）というように月の換喩でもって語られる。主税が駆逐しようとする河野家の夫人・富子とかつて河野家の馬丁だった貞造との間に生まれた不義の子・道子は、「日向より蔭に、昼より夜、日よりも月に風情があ」（「道子」の章）る人物として登

場する。この道子が、主税に乞われていまわの際にある貞造を見舞うことを承諾し、日が暮れてから貞造宅を訪ね（「宵闇」の章）、主税が人事不省に陥り、河野家の病院に入院している間に主税の病室を訪問するの月夜の晩である（「廊下づたい」の章）。

極めつけは、主税が静岡で家を借りるところから何もかも世話を焼く河野家の次女・菅子と主税が性的な関係を持ったと思われる「うつらうつら」の章の直前である。「うつらうつら」の章では、鏡花得意の朦朧とした文体によって、その関係が暗示されるにとどまるが、この朦朧体による表現のはじまる直前の場面で、主税は湯に入る。そのときに主税は月を見、「思わず打仰いで、「おお、お妙さん。」俯向いた肩がふるえて、「お葛！」と踵跟めいたように」なる（「貸小袖」の章）。月夜の晩に、お妙やお葛を思い出しながら、菅子との性的な関係へと踏み出すのである。

ここに挙げた女性たちは、芸妓であったり、正統な出自でなかったり、いずれも、いわゆる日陰者と言ってよい存在である。だからこそ、主税は彼女らの救済を願ひ、彼女らの境遇に義憤を覚える。主税は、けつして声に出しては主張されない彼女らの恨みや悲しさをその身に引き受けて行動するわけだが、この物語のなかで彼女たちは一貫して〈月の女〉として描かれるのである。

一方、これらの〈月の女〉たちに対して、主税が勧善懲悪よろしく駆逐する対象である河野一家の描かれ方はどうであろうか。

主税は「日蝕」から「隼」の章にかけて、まさに日蝕のさなかに河野家の当主である英臣に対して、河野家の腐敗を知らしめ、様々な要求を突きつける。これに対し、河野英臣は用意して持っていたピストルで妻の富子を撃ち、さらには自らをも撃つことで、河野家

そのものの始末をつける。

ここで注意したいのは、〈月〉に対して河野家あるいは河野英臣が「日」として定位されていることである。そして、このことから逆に浮上してくるのは、富子や菅子らといった河野家の女性たちがけつして〈日の女〉として定位されてはいないということである。むしろ、彼女等とても、河野家をいにしえの藤原氏になぞらえようと目論む英臣の言いなりになるしかない、か弱い女性たちなのである。

そして、以上のような設定は、明らかに物語の終わり近くに置かれた「日蝕」の章に対応している。「日蝕は日の煩いとて、その影には毒あり、光には魔あり、熱には病ありと言伝え」られるため、誰もが家のなかに閉じこもり外には人影もないという情景のなかで、それまで、あたかも日のように河野家に君臨し、「一家一門」（この章題もある！）の繁栄を図ってきた河野英臣は、様々な女性たちの負の要素を引き受けた主税の前で自殺する。この構図は、まさしく日が月に蝕まれる日蝕の構図そのものだと見えよう。

興味深いのは、『婦系図』の初出紙である「やまと新聞」の紙面で、一九〇七年一月一日には「今日の日蝕」という記事が、一月十五日には「昨日の日蝕」という記事が、それぞれ掲載されていることである（「新学士」の章を連載中）。シベリア辺りで金環食が見られ、日本では部分日蝕が見られるに過ぎないことを報じ、さらに当日の東京が曇りであったため観測することもできなかったことを報じる。この記事は、それ自体において重要なものではないかもしれない。だが、このとき報じられた「日蝕」という現象は、同じ紙面に連載されていた小説『婦系図』のなかに、物語を動かす重要な仕掛けと

して巧みに取り込まれたのだと言える。

改めて確認しておく、小説内において日蝕は、まず「貴婦人」の章において主税と菅子が汽車のなかで出会う場面で登場していた。食堂車で主税と会話していたイタリア人は日蝕を話題にし、来年、東洋で既食が見られるからその頃また日本に来ると言う。これを受けて「日蝕」の章では、同じ列車に乗り合わせ、二人の会話の内容について主税から教えてもらった菅子が、理学士である夫の島山へイタリア人の話を伝え、理学士の島山が「未だ何等の風説の無い時、東京の新聞へ、この日の現象を細かに論じて載せ」（傍点引用者）る。物語内で起こる日蝕の当日には、夫の記事が評判となったということ。菅子は得意となり、地元の静岡では「今度の日蝕を、（島山蝕）——とさえ称えた」という。物語内での過去のある時点で「東京の新聞」に日蝕についての論説記事が掲載されたと語っているわけだが、これを読む新聞読者は（「日蝕」の章は四月三日、二四日に掲載）、あるいは、三ヶ月ほど前に日蝕の記事を目にしたことを思い出したかもしれない。物語内での日蝕についての設定と現実が起こり記事として報じられた日蝕についての言説とは、必ずしもぴたりと一致するわけではないもの、読者の念頭には微かに意識にのぼったかもしれない。この小説には、こうした新聞小説としての仕掛けが施されていたのではないだろうか。

そして、こうしたタイムリーな題材としての「日蝕」は、主税を主軸としたプロット展開において、象徴的な意味を付与されていたことは間違いない。言うまでもなく「日蝕」とは（日）の光を（月）が遮るといふ現象に他ならないのであり、物語のなかでその時の到来をいち早く知るのには主税だったのである。

三 未来に託された自由恋愛

以上のように、主税の動きに注目するならば、主税が最後に死ぬかどうかはあまり問題ではない。むしろ、（月）に象徴されるいわゆる日陰者の女性たちの恨みや悲しみを背負う主税が、（日）に象徴される河野家とその「家族主義」を打ち砕くというプロットそのものこそは、掲載紙である「やまと新聞」を考慮するとき、その重要性が増すだろう。花柳界や芸能の記事を多く掲載していた「やまと新聞」の読者たちには痛快なものとして読まれたに違いないからである。そして、こうした読者たちにとって、主税が自由恋愛に基づく結婚の必然性を主張することで河野の「家族主義」に対峙する展開こそは、時代の一歩先を行くスリリングな内容として受容されたことだろう。

当時、恋愛結婚に対する許容度はまだまだ低かった。「はなむけ」の章において、河野英吉と妙子の縁談をまとめようとするアバ大人に対して、娘に惚れている男（主税のこと）に妙子の縁談を任せると酒井が言うとき、アバ大人が「します」と云うと、貴下は自由結婚を御賛成で」と問い返す部分には、まさにこの時代の常識が現れていた。一方、「私語」の章において主税と菅子が互いの主張を戦わせ、家が大事か個人の自由が大事かを論じて合っている場面では、「そう貴下の云うようには参りませんもの」と思う通りに行動できない世の中であることを吐露する菅子に対して、主税ははっきりと「恋愛は自由です」と宣告していた。主税を動かす基本原理は、まさにこうした自由恋愛に関する信念なのである。

ここで改めて紙面に目を転じるなら、この「私語」の章が連載さ

れている前後において、実は「やまと新聞」では登張竹風の「自由恋愛の説」という論説文が連載されていた(全一二回)。

竹風はまずはじめに「或る一説によると」と断つた上で「恋愛は古今東西白昼公然と天日を仰いで行はるゝものではなく、照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜としやれて、人目を忍んで、手に手を取りて、嬉しい仲間やないかないと」(四・三)行われるものだと述べる。それというのも、「恋愛の自由」について「今日のわが社会は、少しも認めて居ない」し(四・七)、「恋愛はまた結婚と離して論ずることは出来」ず、これらに対して「国家」や「宗教」や「社会」「家族」「友人」などが干渉してくるからだと述べている(四・八)。要するに当時の日本では「恋愛あつての結婚ではなく、結婚あつて而して後の恋愛」(四・一〇)という現状であつたことを確認している。

このような状況のなか、しかし、竹風は「自由恋愛とは、個人と個人との抱合でなければならぬ。家族が干渉したり、社会が束縛したりするのは、以ての外的沙汰だ」(四・一三)と主張し、女子教育への期待をも表明する。すなわち、女子教育が「女子の個人性を発達せしめ、女子の人格を高尚ならしめて、いつかは男子と平等の地位に立たしむる」べきであり、「女子教育の目的は良妻賢母を作る」のではなく「女子の個人性の円満なる発達を図り、優に自由恋愛に遊び得る資格を養成するを本義とす」と論じている(同)。そして最後には、女性が独立できるだけの才能と技術を身に備えた上で自由離婚さえも勧めるに至る(四・一四)。これらは現状では無理だという認識があるのか、将来のこととして期待されている。

竹風の論説文「自由恋愛の説」が当時の現状認識を物語るもので

あるなら、結婚は相変わらず旧来通りのしきたりに則つて、当人の(主に女性の側の)自由意志や感情は尊重されることがなく、周囲が勧める縁談に従うだけ、というものであつたはずである。「婦系図」に描かれる主税とお葛のような自由な恋愛はやはりタブーであり、河野家の論理の方が圧倒的多数派であつただろう。だからこそ、主税が女性と性的な関係を持つような場面では、「天日を仰いで行は」れることなく「人目を忍」ぶ形で描かれるのである。

この竹風の自由恋愛を奨励する論説文と並行して、「私語」の章での主税と菅子の対決とも言ふべき議論の応酬が掲載されていることの意味は無視できない。自由恋愛主義者の主税が、家の繁栄を願う家族主義者の菅子を言い負かしつつ、しかし菅子と性的な関係を持つという一見すると矛盾しているようにも感じられる関係性を描く物語の傍らで、竹風の論説文は自由恋愛をめぐる現状を的確に整理してみせてくれている。この竹風の主張を参照するなら、矛盾をはらんだ主税の行動はまさしく、規範に抗う者の曲折として受け取ることができのではないだろうか。すなわち、「やまと新聞」の紙面では、小説と論説文とが互いに響き合うようにして「自由恋愛」に関する主張が繰り広げられていたのである。

さらに注目されるのは、竹風が自由恋愛を将来に期待する論旨を展開した最終回(四・一四)では、その同じ紙面に「螢」の章における酒井によるお葛の看取りの場面が掲載されたことである。酒井は、お葛に向かつて「未来で会え、未来で会え。未来で会つたら一生懸命に縋着いて居て離れるな。己のような邪魔者の入らないように用心しろ」(傍点引用者)と声をかけるが、この「未来で会え」の意味はもはや竹風の論説文に明らかであろう。酒井はこの発言に

おいて自らを旧世代に属する「邪魔者」と称し、竹風言うところの「干渉」する存在であることを認めている。

酒井は、「草深辺」の章で、家族主義と個人主義がかつて新聞紙上で議論されたことがあったとき、家族主義論者の河野英臣に対し、敵対するように戦った個人主義論者だと描かれており、かつ妙子の縁談をめぐるアバ大人とのやりとりからも、個人主義者であることがうかがえるが、しかし、物語全体を通して見たとき、酒井の人格には不徹底さが見て取れる。新聞で個人主義を標榜したとはいえ、酒井は妻ではない女性すなわち芸妓の小芳との間に一子（妙子）を設けているからである。生さぬ仲の子を引き取り認知して育てる態度は、妙子が芸者の子だと知って「家名に係わる」という理由で縁談を断る英臣に比べれば、はるかにマシかもしれないが、「自由恋愛は、一生たゞ一度でなければならぬ。即ち一世一代でなければならぬ」（四・一四）と主張する竹風の自由恋愛観からすれば、酒井はすでに自由恋愛の理想から外れている。小芳や酒井の妻の側に立ってみれば、生さぬ仲の子を不平一つ言わずに我が子同然に育てる妻にも、自ら産んだ子を育てることができない小芳にも、負担をかけていることになるのだから。酒井が自ら「邪魔者」と述べる件りに至って、ようやく読者は酒井の人格に多少の納得を覚えるのである。

同じことは、主税その人にも、そのまま当てはまる。子どもこそくないものの、複数の女性と関係を持ち、お妙にも気持ちに向けているようでいながら、それでいてお鳶を一筋に想うかのような主税の態度振る舞いは、竹風の自由恋愛観からすれば、やはり理想を逸脱していると言わざるをえない。ただし、主税の人物造型については、

河野家へ天誅を下す役回りという側面からも分析されなければならず、かつ「十六や七の何にも知らない、無垢な女が」「羞（はにか）み込んで、ほうと成って、俯向くので話が極つて」（「隼」の章）結婚することになってしまふ現実社会の女性たちにとつて見れば、主税は女性たちの内面においてははじめて慰安を感じる存在となつたであらう側面にも注意をしなければならぬ。新聞読者たちにとつて主税とは、矛盾を抱き、葛藤しながら闘うヒーローであつたと言えるだろう。新派劇を介して、多分にバイアスのかかつた受容がなされてきた『婦系図』は、改めて新聞小説という本来の形態に即して読み返すとき、その魅力を再発見しうる。本論文は、こうした読解に向けた一つの問題提起の試みである。

注(1) 登張竹風「鏡花の人となり」（『文藝往来』一九四九・三）

(2) 鈴木康子「『婦系図』論」（『国語と国文学』一九七八・二）

(3) 金子亜由美「妙子という『婦』——『婦系図』を司るもの——」（『論集泉鏡花 第五集』和泉書院、二〇一一・九）。

(4) 山田有策「ピギナーズ・クラシックス近代文学編 泉鏡花の『婦系図』」（『角川ソフィア文庫、二〇一一・六』）

(5) 例えば、「はなむけ」の章において、酒井俊蔵がアバ大人に向かって、娘に惚れている男（主税のこと）に娘の結婚話を取り決めさせるのだ、と啖呵を切る場面での酒井俊蔵の理屈は、論理的に破綻していると言わざるを得ないし、主税は「故郷の静岡へ引込む、と云つて居ました」という酒井の発言も、本当は静岡出身などではなく浅草育ちである主税の来歴とは合わない。だが、これらは単にアバ大人に対する啖呵であり方便として理解することで、酒井の人物像とともに説明可能なものとなり、

アバ大人を虚仮にする物語構造と合致するものとなる。

(6) この点について付け加えれば、鏡花自身がこの物語を断片化し一部をクローズアップさせた戯曲「湯島の境内」を書き残してきたことや、様々なパターンで舞台上演される際にその都度、立ち会って見てきたことを踏まえるとき、主税が死ぬ結末、あるいは死なない結末、遺書がある場合ない場合、どれであっても時と場合によって物語はそれぞれに成立すると考えたと思われるし、言ってみれば、その都度のとりあえずの結末（決着）の付け方であつて、結末の付け方さえもが方便（便宜的な措置）に過ぎないと言えるのではないか。物語にとつて唯一絶対の強固なストーリーラインは必要ないという、いわばアンチ近代小説を実践してみせた、結末の書き換えだと言えるだろう。そして、『婦系図』においてむしろ重要なのは、書き換えられなかった箇所の方であろう。

(7) 河野英吉と早瀬主税がどこでどのように知り合ったのかについては、はっきりとは書かれておらず、不明である。文学士である河野英吉と、学位を持っていない早瀬主税とは、一体どこでどのように知り合うことができたのだろうか。「新学士」の章での二人の会話から類推できるのは、主税は女性のことでいつも河野から相談を受け、いわば「遊蕩の顧問」のような関係であったということである。はじめて知り合ったのも「遊蕩」の場面であつたかもしれない。

(8) 一九〇七年四月三日〜四月一八日まで断続的に連載された。この記事が掲載されていた間、『婦系図』は「道子」「私語」「宵闇」「螢」の各章が連載されていた。

受贈雑誌(五)

上智大学国文学論集

湘南文学

昭和女子大学大学院日本文学紀

要

叙説

人文

人文学報

成蹊国文

成城国文学

成城国文学論集

清心語文

全国文学館協議会紀要

専修国文

高岡市万葉歴史館紀要

高岡市万葉歴史館叢書

滝川国文

滝川文藝

玉藻

上智大学国文学会

東海大学日本文学会

昭和女子大学

奈良女子大学国語国文学会

鹿児島県立短期大学

都立大学人文学部国文学研究室

成蹊大学文学部日本文学科学研究

室

成城国文学会

成城大学大学院文学研究科

ノートルダム清心女子大学日本

語日本文学会

全国文学館協議会

専修大学日本語日本文学文化学

会

高岡市万葉歴史館

高岡市万葉歴史館

國學院短期大学国文学会

國學院短期大学国文学会

フェリス女学院大学文学会